

たけだ かずお

| | |
|---------|--------------|
| 氏名 | 竹田 和夫 |
| 学位 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 新大院博(文)第28号 |
| 学位授与の日付 | 平成18年 3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 博士論文名 | 中世社会と五山僧の研究 |

| | | |
|--------|----|---------|
| 論文審査委員 | 主査 | 教授 矢田俊文 |
| | 副査 | 教授 小林昌二 |
| | 副査 | 教授 荻美津夫 |

博士論文の要旨

本論文は、『蔭涼軒日録』『鹿苑日録』をはじめとした古記録における五山関係記事の分析を行うことにより、五山と五山僧の活動を中世社会の中に位置付けその役割を考察したものである。

第一章は、蔭涼職季瓊真薬が五山領を核にした荘園経営を指揮していたことを明らかにしたものである。第二章は第一章で対象とした時期以降の変化について、蔭涼職亀泉集証を軸に分析したものである。第三章は五山僧の代官請負が顕著に見られる美作国荘園を対象に荘園経営を分析したものである。第四章は公家領(山科家領)における五山僧の請負の実態を備中国の水田郷や砦部郷を対象に検証したものである。

第一章～第四章に共通する荘園経営の問題では、分析の対象とした永享～明応年間には室町期中でも将軍権力・幕府奉行人体制の起伏のある時期ということもあり、五山の荘園経営についてもこれに左右されるところが大きかったこと、経営主体の五山の組織自体が指導的僧である都寺の金銭トラブル・実務僧の違乱・僧相互の代官職競望行為等の問題を抱え続けたことを指摘する。さらに、五山僧による代官請負が従来研究で考えられていた以上の多数の東班衆に担われていたこと、さらには西班衆の僧により行われていた事実を明らかにしている。

第五章は、対外交渉における五山僧の立場は国書の起草や正使・副使への任命などで説明されてきた従来の研究に対する批判を行い、広義の外交事務に目を向ける必要を提起している。

第六章は、五山僧の詩画軸制作における蔭涼職立場を考察している。本章は従来美術史や五山文学研究から特定の画僧や文筆僧に焦点をあてて論じられてきた傾向を見直し、詩画軸制作について差配した側の蔭涼職の立場から検討している。検討の結果、歴代蔭涼職が賛詩や画僧への指

示をはじめ、詩会の主催などの指揮を行っていることを明らかにしている。

第七章は、従来全体像が十分には把握されず、建築史研究者により、幕府側から見た建築への関与という視点にとどまっていた五山僧の建築経営について五山側から考察したものである。考察の結果、五山僧による建築事業への関与は蔭涼職を核になされていたこと、関与した僧は東班衆・西班衆にまたがっていたこと、修造司は荘園経営にも従事するケースがあったこと、材料確保にあたってはその保証を幕府から過書発給などで得ていたこと、五山寺院以外の顕密寺院での建築経営も見られたこと、幕府の作事関係の諸奉行との連携が見られたこと、寺院ごとの職人集団の抱え込みがみられたことを明らかにしている。

第五章～第七章は、外交実務・詩画軸制作・建築経営の細部に至るまでの蔭涼職差配の実態を明らかにしたもので、その手順は住持一般や荘主への差配と共通するものがあるとする。寺院経営や荘園経営で能吏とされた僧が外交実務・絵画制作・建築経営にも同時期に関与したこともあることを浮き彫りにしている。

第八章は、五山社会を結ぶ存在として五山寺院管下の力者を検討したものである。力者は労働奉仕担当のみならず、將軍御成の出迎え・輿舁・警護、荘園経営の使節、作事造園、外交使詩画軸送達、五山と地方荘園を結ぶことなど、その役割は広範なものであり蔭涼職を支える存在でもあったことを明らかにしている。

以上のように、本論文は、蔭涼職の指導性と五山僧の多面的活動を明らかにしている。

最後に、室町期の蔭涼職による五山統制とそこで展開した五山僧の活動を考える時に、歴代蔭涼職の力量が優れていたことや季瓊真蘂のように僧侶の域をこえた幕府政治上の相応の地位が背景にあったことは間違いないものの、従来の研究史で考えられていた以上に、五山という組織は中世社会の政治・外交・文化の諸分野と結びつき、人材を輩出する恒常的なシステムを有していたことを強調している。さらに、蔭涼職は支配者ではなく差配者であったこと、荘園経営や外交も統制は絶対的なものではなく五山内部と外部將軍奉行人守護さらには他の宗教勢力との微妙なバランスとの恒常的な駆け引きの上に存在したとしている。

審査結果の要旨

本論文は、寺院沿革史・宗教制度史や教団史とは異なる視点である黒田俊雄氏が提起した寺院社会史論をふまえ、五山と五山僧の活動を中心に寺院社会史を考察したものである。

本論文で評価できる主な点は次の点である。

いままでの主な禅宗史研究は、教学史・宗派史・五山史、個別寺院史、個別禅僧伝、幕府政治史、幕府経済、荘園経営、外交(使節・文書起草)、五山文化史、儒学との関係、建築史であった。しかし、それぞれは個別に研究がおこなわれており、全体を把握して研究する視点が弱かった。そのような研究状況を克服するため、本論文では、寺院社会史という視点で五山と五山僧の活動の全体像を解明している。寺院社会史研究を進展させる論文として高く評価できる。

また、従来、美術史の分野が取り組んでいた詩画軸研究、建築史の分野が取り組んでいた建築について、歴史学の立場から取り組み、外交実務・詩画軸制作・建築経営の細部に至るまでの蔭涼職差配の実態を明らかにし、その手順は住持一般や荘主への差配と共通するものがあり、寺院経営や荘園経営で能吏とされた僧が外交実務・絵画制作・建築経営にも同時期に関与したこともあることを明らかにした点は評価できる。

さらに、五山社会を結ぶ存在として、力者が労働奉仕担当のみならず、将軍御成の出迎え・輿舁警護、荘園経営の使節、作事造園、外交使詩画軸送達、五山と地方荘園を結ぶことなど、その役割は広範なものであり蔭涼職を支える存在でもあったことを明らかにした点も評価できる。

本審査委員会はこれらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容をもっていることを認定した。

さらに、本論文はきわめて歴史学としての専門性の強いものであることから考えて、竹田和夫氏に博士（文学）を授与することが妥当であると一致して判断した。